

ができます。その様子をまずはお墓の状況から見ていきましょう。薬師の森遺跡第3次調査で発見された木棺墓からは、青磁の椀や皿が7点まとまって出土しました（写真16・17）。椀は龍泉窯系青磁、皿は同安窯系青磁と呼ばれるもので、両方とも12世紀後半頃に中国(当時は宋)の南部で焼かれたものです。当時、陶磁器は全て海外(主に中国)からの輸入品だったため、大変高価で貴重であったことでしょう。一般的にこの時代のお墓に副葬する陶磁器は1～2点程度であり、一つのお墓の中から7点の青磁が出土することは非常に珍しく、ここに埋葬された人物の経済力や身分を示すのかもしれませんが。大野城市内における鎌倉時代頃のお墓は、ほとんどが乙金地区に集中しており、薬師の森遺跡では現在までに15基ほど発見されています。新たな土地開発に乗り出した結果、成功をおさめた人々の姿を想像できます。

ii) 乙金村のルーツ？

次にムラの様子をみていきます。薬師の森遺跡ではたくさんの溝が発見されていますが、そのほとんどは直線的なもので、直角に折れ曲がるものもあり、屋敷地を囲む施設と考えられます（写真18）。溝で区画された内部には直径30cmほどの柱穴が無数に発見されており、多くの建物が建っていたことでしょう。このように溝で囲まれた屋敷がたくさんあり、多くの人々が生活したことを物語っています。また薬師の森遺跡第7次調査では深さが5mにも及ぶ巨大な井戸が発見されており（写真19）、当時の土木技術の高さを知ることができます。



写真18 たくさんの柱穴とムラを囲む溝



写真19 巨大な井戸



写真20 発掘された水田跡



写真21 水田に残された足跡

iii) 大野城市内初、水田遺跡の発見

薬師の森遺跡第5次調査では、この時代の水田（写真20）が発見されました。現在の水田と同じように畔で区画され、約40区画を確認することができました。一区画の面積は40～80㎡程度のものが多く、現在の水田と比べると小さくていびつな形をしています。一見不便そうにも見えますが、自然

の谷地形を利用して効率よく水田を作るための工夫だったようです。また水田を調査する途中、当時の人々の足跡（写真21）を発見することもできました。足跡は20cm以下のものが多く、子ども達の足跡なのかもしれません。

実はこの水田、厚さ20～50cmもある砂の層そうに覆おほわれていました。この砂は洪水で運ばれてきたものと考えられ、当時、大変な被害であったと予想されます。しかしこの砂がタイムカプセルとなり、800年前の水田の姿、人々の技術や工夫を私達に伝えてくれることとなりました。

6. 江戸時代

江戸時代の書物「筑前国続風土記拾遺」は御笠郡乙金村について、「本村（古野・上方・下方）雉尾」に集落があったことを伝えられています。本村とは現在の乙金公民館周辺、雉尾とは雉子ヶ尾つまり大城小学校周辺のことを示しています。乙金公民館から乙金宝満宮の一带は現在でも細い路地が入り組んでおり、江戸時代の農村の面影を今に伝えていいます。江戸時代の遺跡の多くは現在の集落の下に眠っていることでしょう。

発掘調査では、墓地を中心とする遺跡が発見されました。薬師の森遺跡第16次調査では200㎡ほどの非常に狭い範囲の中で、70個以上の墓穴が発見されました（写真22）。遺跡からは墓石も出土しており、「享保」「宝暦」「寛延」という年号を記したものがあることから、18世紀代を中心とする墓地と考えられます。墓の形は円形のものと同方形のものがあり、棺おけの破片が出土するものがあることから、一部は木棺に納められていたのでしょう。当時のお金である寛永通宝が出土しており、六道銭（三途の川の渡し賃）として墓に納められたものと考えられます。人骨が残っているものもあり、当時の埋葬方法や葬送儀礼を知る上で大変貴重な発見といえるでしょう。



写真22 江戸時代の墓地

7. おわりに

本書で紹介した内容は、調査成果のごく一部に過ぎませんが、1万年以上にわたって連続^{れんめん}と人々が暮らし、歴史を積み重ねてきたことが分かってきました。数年前、水田と畑、山林が広がっていた田園風景は、区画整理事業によって新しい街に生まれ変わりつつあります。新しい街ではどのような暮らしが始まり、どのような歴史が重なっていくのでしょうか。



写真23 変わり行く乙金（平成23年2月）

大野城市の文化財
第43集

平成23年3月31日

発行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2丁目2番地1号

印刷 (株)アドネット九州
福岡県福岡市中央区渡辺通2-3-27

